

第3章 中央製作所 I (相生町) 初代社長／高橋吉助

昭和26年～昭和40年



伊藤昌六氏

元社員

伊藤昌六氏、阿部正夫氏、滝田矢子氏、伊藤銃一氏に聴く

～やりがいのある会社でした～

昭和 15 年創業の有限会社花巻鉄工所は昭和 24 年に閉鎖、昭和 26 年に高橋吉助が中央製作所として改めて個人創業しました。その後昭和 40 年 10 月 4 日に株式会社として法人化、昭和 42 年には会社を現在の宮野目地区に移転し、発展の基礎をつくりました。その様子を当時の従業員伊藤昌六さん、阿部正夫さん、滝田矢子さん、伊藤銃一さんに伺いました。



昭和32年頃の工場の様子



みなさんはいつ「中央製作所」に入社されどんなお仕事をされましたか。

伊藤昌六さんは昭和 32 年入社し旋盤工で機械の部品づくり、阿部正夫さんは昭和 37 年入社し溶接作業が中心、滝田矢子さんは昭和 38 年入社しブロックづくり、伊藤銃一さんは昭和 39 年入社でとび職、当時従業員は 9 人でした。ゴムぞうりを履いて働いたもんです。

お仕事の内容を具体的に紹介してくれませんか。

第一工場は機械工場で、第二工場は鋳物工場、第三工場はブロック工場でした。そこで鋳物をつくり、機械の部品をつくり、溶接して完成させる。また、ブロックを作り現場に運んで組み立てる。さらに機械の修理などもしていました。また、社長が型紙を持ってきて私達が試作品を作り、完成させて製品化するといったこともしばしばでした。

みなさんの勤務と待遇はどのようなものでしたか。

8 時出勤 5 時退社、昼休みは 1 時間で、一日 280 円の日給制、月末に纏めて給料としていただきました。

28日間休まないで働くと2日分の割増となりました。でも、給料を月末にまともにもらったことはなかったなあ。今日はお出るとかと思って会社にも出ない。会社を休んで安定期に行くこともありました。

そんな時に限って社長が家に来て「なんとか働いてくれ」と頭を下げる。それを親父が見ていて「社長を助けてやれ、マンマは食わせてやるから」という、そんな状態でした。

給料がなくてもなんとかあった時代だった。当時はどこの会社も似たり寄ったりだったと思いますよ。一番苦しい時、金ヶ崎の三菱製紙工場の重油タンクの仕事が入ってきました。年末も休まないで働きました。仕事があるということは嬉しいもんですよ。

そんな会社、みなさんはどうして辞めなかったのでしょうか。

なぜなのでしょうねえ、やっぱり仕事が面白かったからかな。社長が図面一枚持ってきて作れという、ああしたらどうか、こうしたらどうかと考え考えやってみる。そんな繰り返しのなかから新しい製品が生まれる。出来あがった時は嬉しいもんです。そんな喜びがあったことが辞めなかった理由かな。

今は流れ作業、一つの製品を自分の手で完成させることはありません。私達は一枚の製図を見て工夫を重ねてものをつくり、現地で使ってみて改良する、そんなことのくりかえしでした。だから、腕も上がったんだと思いますよ。

いやあ、いいお話ですね、まさに職人ここにありです。みなさんがいたからこそ今の会社がある、そう思います。その後、会社はどうなりましたか。

昭和40年代に入って社会が変わってきました。高度経済成長時代に入ったのです。鉄骨による建築が始まり、ブロックの需要が増え残業をするようになりました。9時まで残業すると丸高タクシーの2階の店で焼き肉が振舞われました。腹いっぱいになって歩いて帰ったもんです。従業員も40名を超え、北上方面からの従業員もいてバスで送迎するようになりました。このような活気の中で坂田



昭和30年代の工場の様子

昭和32年頃、工場裏国鉄操車場



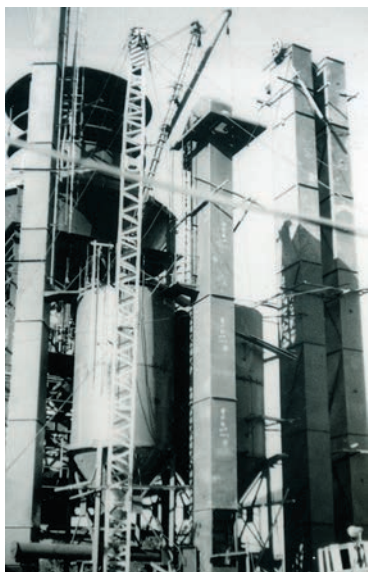
トヨタ車に乗る伊藤昌六氏



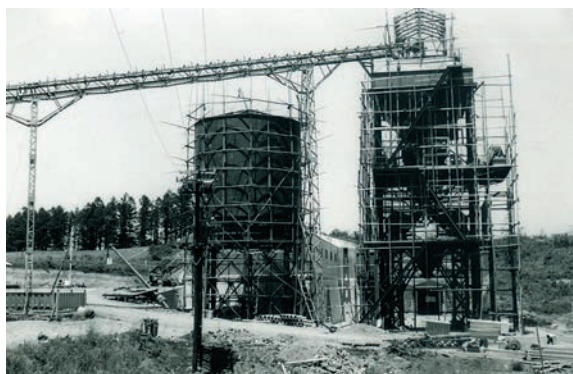
宮城県釜房ダムセメントサイロ



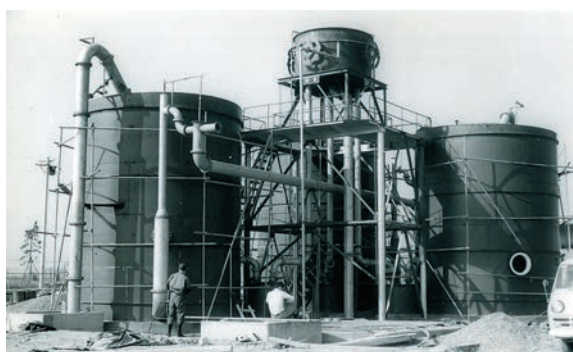
阿部正夫氏



仙台バッチャープラント



四十四田ダムセメントサイロ



埼玉県深谷市逆栓ろ過タンク

建材、台温泉の松田屋旅館、いとうわ、平野クリーニング店などが建設されていくのです。

北日本機械や和賀仙人の日本重化学工業からも仕事が入るようになり、鉄骨の組み立て、歩道の手すりも作りました。八幡製鉄所関係の仕事もやりました。日曜日もなかったし、年末まで働きました。大晦日、家族が食べないで待っていたこともありましたよ。

仕事も増え会社も順調、よかったですね。仕事も大型化すると技術の習得が大変ではありませんか。

私達は技術なしから出発、必要に応じて工夫して腕を磨いていきました。こんなこともありました。ろ過器を作る工事の時、クレーンがありません。私達は電柱3本でクレーンを作り、ウインチで巻き上げました。デリックも作りました。川崎などで仕事をした時に見た経験から知恵を絞ったのです。足場も丸太で組んだものです。今想えばよくやったもんです。富士大学の丸い屋根、ダイヤモンドトラスと言うんですけど、それもやりました。お前達よくやったなと言われましたね。

このように会社が上向きかけた時、佐々木郁夫氏が専務として会社に来られました。なにしろ佐々木専務は岩手大学工学部機械工学科出身、技術は確かです。専務に教えられながら働きました。こうして、四十四田ダムをつくり、湯田ダムのセメントサイロをつくり、釜房ダムの仕事もしました。八甲田のロープウェイもやりました。

現場は全国的に広がったんですね。どんな生活になったんですか。

青森の板柳、埼玉の深谷、春日部、函館でも仕事をしました。北は札幌から南は九州八幡製鉄まで広がりました。一現場二カ月が普通、主に旅館に泊まりましたが、のちには、民家に三度のご飯だけお願いし泊めていただくようになりました。もちろん夜具をはじめ生活用品一切を送っての生活です。その頃、ブロック部門は鉄工部門に吸収されました。

では、滝田さんも鉄工関係のお仕事をしたんですか。

やりましたよ、鉚投げとかね（真っ赤に焼いたリベットを上にいる作業員に投げ渡す仕事）。受け損じると作業着が焼けてしまってね。いやあ、滝田さんはなんでもできる人、男と同じように働きました。後には、新入社員の教育係で「この機械はこのように、その機械はこのように使う」と教えていました。



滝田矢子氏

会社も順調に発展し社員の待遇も良くなっていったでしょうね。

建築部門が誕生し会社は発展しました。仕事を終えるとご苦労分として飲まされ、漬物の差し入れもあり、嬉しく居心地が良かった。そして、毎日もっきり・梅割りを呑み、調子良ければ双葉町に流れ、縄のれんをくぐりました。

そして、忘年会も新年会も盛大に行われ、社員旅行も始まりました。第一回の社員旅行は男鹿半島で、その後沖縄にも北海道にも金毘羅さんにも行きました。野球部もでき各社対抗の大会も開催されました。

45年から50年ごろまでが最盛期で、その頃会社で所得倍増の話も出ました。三月には給料相当額の年度末手当が出たこともあります。何もかもうまく回転していたんです。



男鹿半島への社員旅行

その頃のことで、今も語り草となっているエピソードがありますか。

宮古方面で仕事をした時のことは忘れられないなあ。ある職員の実家が船越にあるということで、それをいいことに上がり込んでお茶をいただいた。そのうちにみんな顔なじみとなりお昼を御馳走になり、最後にはお風呂をいただき泊まるようになった。お酒も飲めた、極楽この上なし。そうしたら何とその家は佐々木専務のご実家、私達は大いに助けられました。

そういえば、こんなこともありました。若い社員が結婚をしました。お決まりの新婚旅行、行った先で奥さんはおかんむり、「なんでこんなところに連れて来たのよ」と。なぜって、そこは春日部、新郎さんが働いていたところ、



中央製作所野球部



社員旅行における最上川下りの様子



伊藤銃一氏

しかも飯場です。彼は花巻以外にはそこしか知らなかった。今だから言える思い出話です。

会社は宮野目に移転したのですね。

そのとおりです。昭和 42 年に中央製作所は宮野目の今のところに移転しました。そしていよいよ大発展していくのです。そのことは後輩が話してくれるでしょう。私達はこれにて失礼いたします。

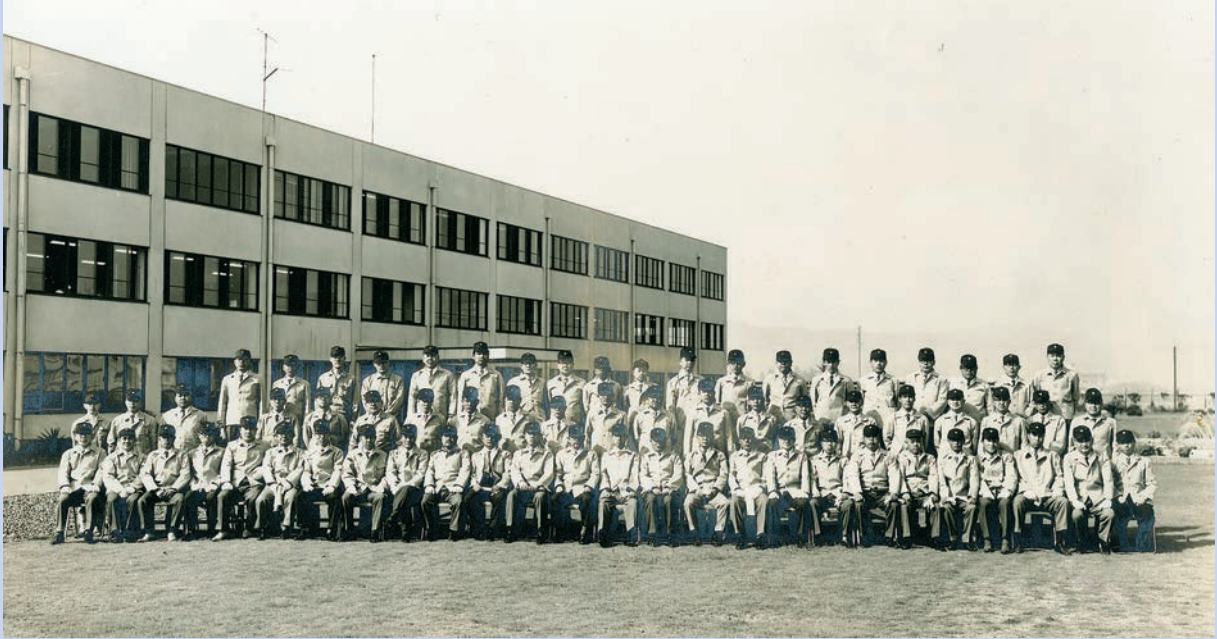
皆様は退職後時々このようにお会いしていますか。

時々ね、「OB 会」がありますから。「OB 会」は高橋吉助社長が会長になってから誕生し、2 年置きくらいにやってきました。会長がお亡くなりになってやっておりませんので、今回の 50 周年がいい機会になるのではないかな。

皆様、本日はまことにありがとうございました。皆様のお話から会社の貴重な歴史を知ることが出来ました。とりわけ、皆様の職人魂が会社を支え発展させたと知り感動致しました。先輩諸氏あつての会社と改めて知り、この 50 年史編集の意義も高められたと思っております。本日はまことにありがとうございました。



左から滝田矢子氏、伊藤昌六氏、伊藤銃一氏、阿部正夫氏



スミフレームV指定鉄骨会社総会(昭和41年5月26日) 前列左から2人目が高橋吉助社長



スミフレーム会全国大会 於有馬温泉中の坊有馬グランドホテル(昭和43年6月14日) 前から3列目右端が高橋吉助社長



戸来諭氏

元花巻市助役 戸来諭氏に聴く

～先見の明ある措置でした～

中央製作所は昭和40年に法人化後、昭和42年に本社を花巻市東宮野目に移転、工場を新設し、鉄工業の基礎を固めました。この移転にあたって多くのお世話を頂いたのが当時市役所商工課に勤務され、その後助役まで務められた戸来諭さんです。当時の様子をご自宅で伺いました。

「中央製作所」が宮野目に移転したのが昭和42年、当時はどんな様子でしたか。

当時の花巻市政は企業誘致と地場産業の育成が二大施策でした。企業誘致条例をつくり誘致を促進し、既存の地場産業を育成し発展させることです。その代表例が和同産業で、南川原にあった本社工場を現在地に移転し、発展させたのです。



昭和50年代 宮野目工場外観

当時戸来さんはどんなお立場におられたのでしょうか。

当時私は市役所商工課勤務、土地開発公社初代の係長で、土地買収に奔走していました。中央製作所の宮野目移転、戸田鉄工所の山の神移転はその大きな対象でした。

中央製作所の宮野目移転のきっかけはなんですか。

昭和39年のことと記憶しておりますが、高橋吉助社長さんが市役所に来てこう話されました。

「今の会社のあるところは長い材料の出し入れに大変不便である。どこか適当なところはないものだろうか。できれば、国道筋がよいのだが、そう遠くには行きたくない。」この申し入れが移転の始まりです。

ことはすんなりと運んだのですか。

当時、宮野目の瀬川橋の北側に「マッチ軸木工場」があり、神戸出身の方が将来の花巻の発展を予測して「この宮野目地区は重要な地域となる」と常々話しておりました。

私達もここは国道筋で眺めも良く将来性抜群と考えて



同地区ではS39年に花巻空港が供用開始(現在のいわて花巻空港)

おりましたので、高橋吉助社長の申し出にこの宮野目地区を紹介したのです。

候補の土地は何もない田んぼで、国道には昔の奥州街道を証明する松も生えていました。幸いなことに、地権者も何らかの理由で土地を手放したがっており、ことは順調に運び土地の登記もすんなりといきました。

広大な土地、購入資金も大変だったでしょうね。

いやあ～、最初の購入は四・五反で、そう大きな金額ではなかったと思いますよ。その後、少しずつ購入し続けられ、今の工場地となったと思います。

のちのち聞いたところでは、当時中央製作所の経営は決して順調ではなかったようですが、幸いなことにその当時新しく花巻に進出して来られた銀行がありまして、その協力を得たとも聞いております。

それにしても先見の明ある措置だったのではないのでしょうか。

そのとおり、まさに先見の明ある措置だったと思いますよ。会社も行政もね。ただ、ある意味では当時の社会情勢がその動きを促進させた面もあると思います。何しろ高度経済成長期、右肩上がり、それいけどんだったのですから。

それにしても、今の中央コーポレーションの発展を見る時、あの決定と措置は間違っていなかった。やってよかったとしみじみ思います。いやあ～、ほんとうによかった。

なにかこぼれ話がありますか。

ハッハッハ、これ言っているのかな。当時は土地買収などで一段落すると「一件落着、先ず一献」と言うのが当たり前だね。もちろん今はないが、当時はそれが当たり前だった。ところが、中央製作所に限ってはそれが一回もなかったんだ。高橋吉助社長さんはやらなかった。アッハッハハハ。いやあ～、失礼々々。

最後は愉快なお話で締めて下さり、誠にありがとうございました。今後もよろしく願致します。



増設中の工場



昭和60年には新花巻駅が開業



戸来論氏と佐々木礼子氏